

漢字を活用する力を育てる学習指導の研究

——目的をもって漢字を使う学習活動を通して——

国語科研究会議

井尻 富美代¹

杉本 直美²

堀井 英之³

中村 章子⁴

要 約

漢字は国語科で教えるべき大切な基礎知識であるという認識で、教師は様々な指導を行っている。しかし、それが児童生徒の漢字の使用に結びついていないという自分自身の課題を感じていたことが研究の出発点である。児童生徒の漢字を使おうとする意欲を高め、「漢字を活用する力」を育てることを目標に研究主題を設定した。

本研究では「漢字を活用する力」を、「文や文章の中で漢字を適切に使う力」ととらえる。この力を育てる「取り立て指導」の在り方や工夫について研究を進めた。児童生徒の「漢字を活用する力」についての課題を3つに分類し、それに呼応する手立てを図った。3つの手立ては単独ではなく、相互の関連づけを教師が意識することで効果的になる。これらの手立てを「取り立て指導」に盛り込み、「漢字の理解を深める学習指導」と「目的をもって漢字を使う学習活動」等を構想し、検証授業を行った。児童生徒の姿や発言、実際の漢字使用、学習環境、学習の振り返りなどを吟味し、漢字を使おうとする意欲の高まりと使い方を中心に考察した。これらの研究の過程から、教師が意図的に、目的をもって漢字を使う場の設定をし、漢字を使う経験を児童生徒にさせることが、漢字を使おうとする意欲や実際の使用につながるということがわかった。

キーワード：漢字を活用する力、取り立て指導、意欲、場の設定、関連づけ

目 次

I 主題設定の理由・・・・・・・・・・	36	III 授業実践・・・・・・・・・・	41
1 研究の動機・・・・・・・・・・	36	1 漢字の学習指導のモデルプラン・・	41
研究主題について・・・・・・・・・・	37	2 実際の授業・・・・・・・・・・	44
II 研究の内容・・・・・・・・・・	37	IV 研究の成果と今後の課題・・・・・・・・	49
1 研究の内容と方法・・・・・・・・・・	38	1 研究の成果・・・・・・・・・・	49
2 漢字指導の在り方・・・・・・・・・・	38	2 今後の課題・・・・・・・・・・	50
3 「漢字を活用する力」を 育てる学習指導・・・・・・・・・・	39	参考文献・・・・・・・・・・	50
		指導助言者・・・・・・・・・・	50

¹ 川崎市立南加瀬中学校教諭（長期研修員）

² 川崎市立西高津中学校教諭（研修員）

³ 川崎市立南加瀬小学校総括教諭（研修員）

⁴ 川崎市立野川小学校教諭（研修員）

I 主題設定の理由

1 研究の動機

(1) 日頃の漢字指導で感じていたこと

児童生徒の漢字学習の姿を振り返ると、「小テストの時はできていたのに、数ヶ月を過ぎると漢字を忘れていく」「読みも書きもわかっているのに漢字を使わない」といった状況を目にすることが多く、今まで行ってきた漢字指導に課題を感じていた。工夫して指導を行ってきたつもりだが、児童生徒の漢字使用に結びついていない自分自身の反省も踏まえ、漢字の学習指導の在り方を見直す必要感を抱いたことが研究主題を考える出発点である。

(2) 漢字学習の意義

①漢字の働きと漢字学習の意義

漢字は読む力や書く力の基盤となる大切な知識であると同時に、一字一字が意味をもち、考える力の土台となる。例えば、一見難解な熟語でも、構成している漢字から意味を類推することが可能なように、漢字が理解や思考を助ける。さらに、音として耳から入った言葉はその漢字がイメージされることで意味がわかることや、「コスモス」を「秋桜」と表現することで異なるイメージが広がるように、漢字は思考を深めたり豊かにしたりする働きももつ。また、「漢字仮名交じり」という日本語の表記特性から漢字を含む言葉の種類は多く、漢字の学習が語句や語彙の理解と拡充につながる。さらに、漢字を学ぶことは文字の理解を深めるだけでなく、各教科の学習内容も含めた生涯にわたる学習の基礎を作りあげることになる。漢字に興味をもつことで、主体的に漢字に関わっていく姿勢をも養う。また、漢字を学習することにより、古人のものの見方や考え方にふれることもできると考える。

②語彙力の基礎としての漢字

2004 年文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」では、＜国語科教育で育てる大切な能力＞として、「情緒力」「論理的思考力」「思考そのものを支えていく語彙力」の育成の重要性が述べられている。そして、「思考そのものを支える語彙力を身に付けるためには漢字の重要性を見直した上で、漢字の指導に力を入れていくという観点が必要である。」と指摘している（下線は筆者が追加）。

(3) 漢字指導の実態と課題

教師は国語科で教えるべき大切な基礎知識であるという認識で漢字指導をしている。それは、小4

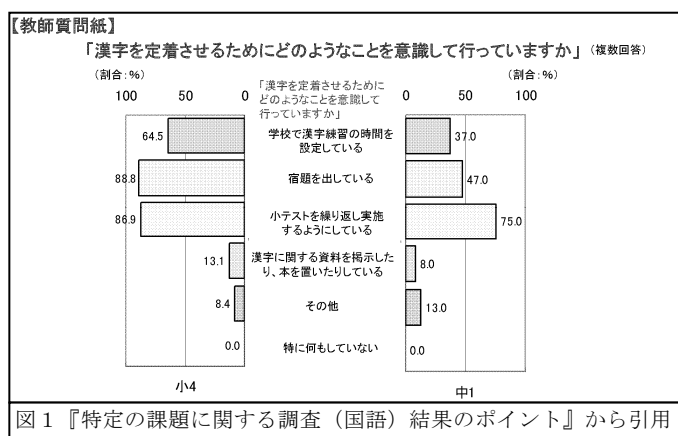


図1 『特定の課題に関する調査(国語)結果のポイント』から引用

～中3のそれぞれ約3,000人を対象に行った国立教育政策研究所教育課程研究センター

「平成16年度特定の課題に関する調査(小学校・中学校)」(国語)の結果からもうかがえる。「漢字指導に力を入れている」という教師への設問に対して、「そうしている」「どちらかといえばそうしている」と回答した教師の割合は、小4：95.3%、小5：93.8%、小6：85.6%、中1：85.0%、中2：80.0%、中3：77.4%である。しかし、「漢字指導に

力を入れている」教師（「そうしている」「どちらかといえばそうしている」と回答）と、「漢字指導に力を入れている」教師（「どちらかといえばそうしていない」「そうしていない」と回答）が担当している児童生徒の漢字の平均通過問題数には、わずかな差しか認められないという結果が出ている。

次に、教師が行っている漢字指導はどのようなものなのか。図1¹⁾のとおり、漢字を定着させるため

1) 「特定の課題に関する調査(国語)結果のポイント」国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部ホームページ <http://www.nier.go.jp/kaihatsu/tokutei/04002010000007001.pdf>

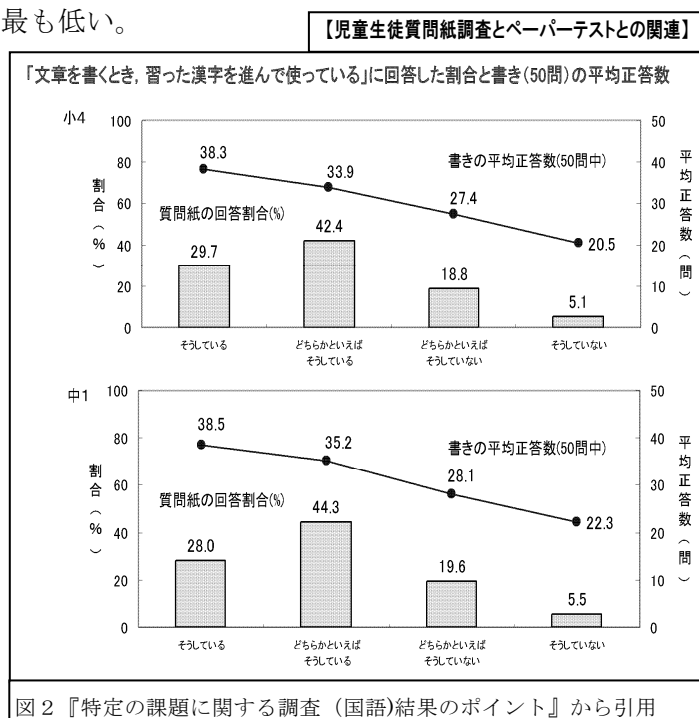
に教師が意識して行っていることは校種により割合は異なるが、「小テストを繰り返し実施する」「宿題を出している」「学校で漢字練習の時間を設定している」が特に多いことがわかる。

では、児童生徒は漢字の学習をどのように感じ、どのようなことが漢字の定着と関連するのだろうか。同調査の児童生徒対象の「漢字は日常生活の中で必要だ」という設問に対して、肯定的な回答は小4で88.8%を示し、それ以外の学年の児童生徒は90.0%を超えるという結果が出ている。しかし、「漢字の学習が好きだ」という設問に対して肯定的な回答をしている児童生徒は、小4が62.5%を示し、他の学年は5割前後で、中2は45.4%と最も低い。

このことから、全学年を通じて児童生徒は概ね「漢字は日常生活で必要だ」と感じているものの、あまり「漢字の学習が好きだ」とは感じていないことがわかる。

質問紙と「書き」の平均正答数の相関関係では、「文章を書くとき、習った漢字を進んで使っている」という設問に対して、肯定的な回答をした児童生徒のほうが、「書き」の平均正答数が多いという傾向が認められる(図2¹⁾)。

このことから、漢字の定着には「文章を書くとき、習った漢字を進んで使っている」という意識が関連し、実際に漢字を使う経験が漢字の定着を促す傾向が高いことがわかる。



以上のような現状や調査から、漢字の学習指導を見直す視点を次のように設定した。

【漢字学習への意欲】多くの児童生徒が日常生活で漢字の必要性は感じている。しかし、漢字学習に対する意欲はそれほど高くない。漢字学習をより楽しいものと感じさせるように学習指導を工夫すること。

【漢字の使用の場の設定】多くの教師が漢字定着のために行っている漢字練習や小テストという漢字指導に加え、児童生徒が文章の中で漢字を使う場を設定すること。

以上、2つの視点を生かした授業の構想の柱を、

- 児童生徒が漢字に興味をもち、意欲的に取り組む学習指導
 - 児童生徒が文や文章の中で漢字を使う場の設定(実生活につながる)
- とし、研究主題及び副題を次のように設定した。

漢字を活用する力を育てる学習指導の研究
 ——目的をもって漢字を使う学習活動を通して——

2 研究主題について

倉澤が「漢字の力とは、単に漢字のよみかきテストに答えられる力ということではない。実際に使える力である。だからいくら正しいよみかきの力を持っていても、手紙や作文にそれらを使わなければ何もならない。」²⁾と記したように、漢字は文や文章の中で使うことができなければ、漢字の力が

²⁾ 倉澤栄吉『倉澤栄吉国語教育全集6 生活に根ざす言語生活』角川書店 1988年 p.13

身についていることにならない。しかし、ただやみくもに漢字を使うのではなく、文や文章の中で漢字を適切に使う力が実際に使える力である。適切に漢字を使うとは、相手・目的・状況・内容・方法に応じて表記を考えた上での使用であると考え。本研究では「漢字を活用する力」を、「文や文章の中で漢字を適切に使う力」とする。首藤が「ことばの力を伸ばす最もよい方法は、ことばを使うことである。」³⁾と指摘するように、「漢字を活用する力」を育てるには、実際に漢字を使う場の設定が必要である。そして、児童生徒が漢字を使う必要性や有用性を実感できるように、自分の目的をもって学習することが重要である。授業の中で「目的をもって漢字を使う学習活動」を何度か経験することで、日常の言語活動にも漢字を活用しようとする姿勢や態度が養われると考える。

II 研究の内容

1 研究の内容と方法

①文献や先行研究の調査

研究主題に基づき、文献や先行研究の調査や収集を行い、研究の方向性を確認した。

②授業の実施

○予備検証授業の実施（7月）

漢字への興味・関心を高めるとともに、漢字そのものへの理解を深め、漢字に親しむことをねらいとした授業を行い検証した。

○検証授業の実施（9月～11月）

国語の言語活動や各教科の学習活動・内容と関連づけを図り、目的をもって漢字を使う学習活動を設定した授業実践を行い検証した。

③研究の考察

検証授業から見えてきたことを次の視点で考察した。

- ・「漢字を活用する力」を育てるために有効な学習指導の在り方と学習指導の有効な関連づけ
- ・「目的をもって漢字を使う学習活動」における児童生徒の姿のとらえ
- ・「漢字を活用する力」につながる言語環境の整備と年間プランの立案

2 漢字指導の在り方

(1) 漢字指導の目標

小・中学校の学習指導要領において、漢字は「言語事項」に位置づけられ、漢字を「文や文章の中で使う」という目標が全学年において共通して示されている。小学校では学年別漢字配当表の漢字を、中学校では学年別漢字配当表の漢字に加えそれ以外の常用漢字を新出漢字として、それぞれ読みと書きの目標が示されている。漢字の書きについては、習得にある程度の時間を必要とするという考えから、当該学年の配当漢字については「漸次書く」となっている。「文や文章の中で使う」漢字の力は、当該学年と次の学年の2年間という時間をかけて身につけさせることが求められている。また、中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の学習指導要領等の改善について」（答申）国語の（ii）改善の具体的事項では、以下のように述べられている（下線追加は筆者）。

（ウ）（小学校）漢字の指導については、日常生活や他教科等の学習における使用や、読書活動の充実に資するため、上の学年に配当されている漢字や学年別漢字配当表以外の常用漢字についても、必要に応じて振り仮名を用いるなど、児童が読む機会を多くもつようにする。また、日常生活において確実に使えることを重視し、実際の文章や表記の中で繰り返し学習させるなど、児童の習得の実態に応じた指導を充実する。

³⁾ 首藤久義・卯月啓子『ことばがひろがる I』東洋館出版 2000年 p.8

(ウ) (中学校) 漢字の指導については、社会生活や他教科等の学習における使用や、読書活動の充実に資するため、常用漢字の大体を読めるようにするとともに、学年別漢字配当表に配当された漢字を使い慣れるようにする。また、社会生活において確実に使えることを重視し、生徒の習得の実態に応じた指導を充実する。

このように漢字の有用性を押さえた上で、確実に使えることを重視した指導の充実を指摘している。

(2) 漢字の「取り立て指導」

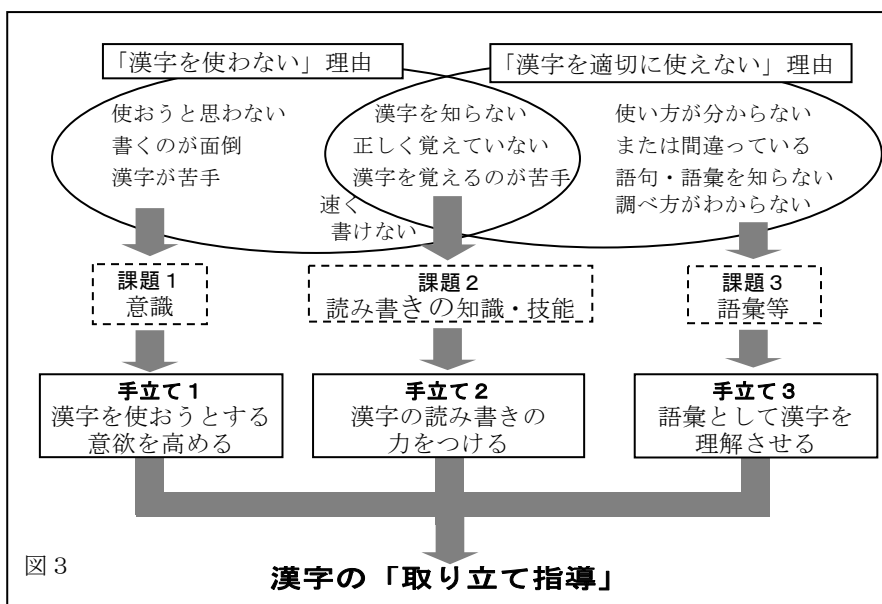
学習指導要領では、言語事項の内容を「『A 話すこと・聞くこと』、『書くこと』及び『読むこと』の指導を通して」と、3領域の中で指導することが明記されている。小学校の学習指導要領では、さらに「これらの事項の中で音声、文字及び文法的な事項など各領域の基礎となる事項は、特にそれだけを取り上げて児童の実態に即して繰り返し学習することが必要になる。」(下線追加は筆者)と記されている。このような「学級の実態や指導の効果を考慮して、特定の内容を単独に取り上げて行なう学習指導」は、「取り立て指導」と呼ばれている。⁴⁾

新出漢字の指導は、広く行われている「取り立て指導」である。読みや書き順・書き方を含めた書字、意味、熟語、用例などの知識を習得させるために、ノートやプリントに漢字を書いて練習させる方法が一般的であろう。練習の方法は児童生徒の実態に合っていることが大切である。さらに、練習の意義が理解され、学習したことが役立つ実感をもたせることも重要である。もし、与えられた反復練習をこなし、覚えたかどうかをテストで評価されるだけなら、児童生徒は漢字学習に対して受身になり、意欲的に取組めないであろう。また、使う経験が少なければ漢字を使う力の定着も難しい。本研究は、新出漢字の指導においては、日常生活の中で確実に使えることにつながる様々な「取り立て指導」の工夫が必要であると考え。例えば、成り立ちや文字としての構造の面白さを学ぶ小単元や、条件に応じて漢字を調べたり、使ったり、集めたりする学習活動を構想していくことである。

3 「漢字を活用する力」を育てる学習指導

(1) 「漢字を活用する力」を育てるための課題

児童生徒が漢字を使わない、または漢字を適切に使えないのはなぜか。その理由の中に、「漢字を活用する力」を育てる上での課題があると考え、児童生徒の状況や発言をもとに整理を試みた(図3参照)。



児童生徒が漢字を使わない、または適切に使えない原因として、左記の3つの課題が挙げられる。注意すべき点は、3つの課題はそれぞれが相互に関連して存在していることである。例えば、児童生徒が学級新聞を書く時に、使おうとした漢字を正しく覚えていないことに気づき、調べようと思ったが調べ方がわからない

児童生徒が漢字を使わない、または適切に使えない原因として、左記の3つの課題が挙げられる。注意すべき点は、3つの課題はそれぞれが相互に関連して存在していることである。例えば、児童生徒が学級新聞を書く時に、使おうとした漢字を正しく覚えていないことに気づき、調べようと思ったが調べ方がわからない

いため、漢字で書くのが面倒になり、漢字を使うのをやめてしまうような状況である。同様に課題に呼応した手立ても3つ設定したが、それぞれ相互に関連し合いながら、児童生徒の「漢字を活用する力」に結びつくと考え。

(2) 「漢字を活用する力」を育てる学習指導

⁴⁾ 松本篁 (日本国語教育学会編集) 『国語教育辞典』朝倉書店 2001年 p.294

本研究では、「漢字を活用する力」を育てる漢字の「取り立て指導」をその内容や目的によって以下のように整理をする。

- 反復練習やテストなど、読み書き習得のための「漢字を覚える学習活動」
- 漢字に興味をもって、詳しく知るための「漢字の理解を深める学習指導」
- 漢字を使い慣れるための「目的をもって漢字を使う学習活動」

「漢字を活用する力」を育てるためには、それぞれの効果とつながりを意識しながら計画的に行うことが重要である。本研究では、「目的をもって漢字を使う学習活動」と「漢字の理解を深める学習指導」を対象に検証を行う。この2つを対象に研究を行うことで、従来から多くの教師が行っている「漢字を覚える学習指導」の効果も高まると考える。

①目的をもって漢字を使う学習活動

卯月は「自分の目的をもって、漢字を探したり、漢字を調べたり、漢字をよく見たり、漢字について考えたり、漢字を使ったりする活動の中で漢字に出会うと、苦痛にならずに、生き生きと漢字の宝の山に立ち向かっていきます。」⁵⁾と、児童生徒が能動的に漢字に関わる学習活動の大切さを述べている。本研究ではこの考えを基盤に、「目的をもって漢字を使う学習活動」について構想する。

○漢字を使おうとする意欲を高めるために

児童生徒が漢字を使おうとする意欲が高まるのは、楽しさや意義が感じられる時であり、漢字を使うことで自分の思いや考えが適切に表現できた時と考える。漢字カルタ(Ⅲ章Ⅰ項のモデルプランにその一例を示す)作りを例に考えてみる。カルタを作って遊ぼうという目的があると、漢字を使うことは必然となり、読み札の文章を考えながら自然に漢字を使う。さらに、できあがったカルタで遊ぶ時も、音として認識した漢字を頭の中で文字に置き換えて探すという行為が漢字を使うことになる。カルタで遊ぶ楽しさに加え、自分が作ったという満足感が漢字への親しみや使う意欲につながると考える。

○漢字の読み書きの力をつけるために

漢字が定着するには、文や文章の中で使うという経験が大切である。ある文や文章の中で使うべき漢字を知らなくても、目的に応じた時間と場を作ることで、児童生徒は辞書で漢字を調べたり、本や資料の文章を見本にしたりして、その漢字を使うであろう。使うことによって読み書きの力をつけていくことができると考える。

○語彙として漢字を理解させるために

文字としての漢字の知識だけでは、文や文章の中で使うことは難しい。文や文章の中で漢字を使うには、語彙として漢字を理解していることが必要である。例えば、「貫」という漢字を知っていても、「貫く」という訓読みや「一貫」や「貫通」という語彙を知らなければ、使うことができない。文や文章の中の使われ方を理解し、様々な文脈にあてはめることで、漢字は語彙として定着する。

②漢字の理解を深める学習指導

「漢字を活用する力」の育成には、漢字そのものについての理解を深めることが重要と考える。漢字に関心がなく、理解も浅ければ、漢字を使うことに意義を感じにくいと考えるからである。

○漢字を使おうとする意欲を高めるために

漢字に興味をもち、漢字への理解が深まることをねらいとした学習指導を行うことは、漢字を使おうとする児童生徒の意識につながると考える。例えば、漢字の成り立ちを学ぶことで、漢字の背景にある歴史や表意文字としての意味を理解することができる。それにより、漢字自体の面白さを知り、漢字に親しみをもつことができるならば、漢字が苦手な児童生徒の学習意欲によい影響を与える。漢字の成り立ちには諸説あり、それぞれの科学的根拠は証明できないが、漢字に興味をもたせ、漢字の世界の奥深さや面白さを印象づける効果は高い。

⁵⁾ 卯月啓子『漢字と遊ぶ 漢字で学ぶ』東洋館出版 2003年 p.47

○漢字の読み書きの力をつけるために

学年が上がると新出漢字の数が増え、複雑な字形も多くなり、覚えることに抵抗を感じる児童生徒が少なくない。漢字の構造を学び、漢字同士のつながりや関係を知ることが、ばらばらだった知識の整理となり、抵抗を和らげることとなる。また、画数が多い漢字でも、いくつかの要素の組み合わせでできている構造を知り、分解する観点をもつことで字形を把握しやすくなる。また、既習の知識を使って未習漢字の読みを類推することもできる。漢字の理解を深める学習においては、児童生徒の実態に合わせて、間違えやすい漢字や定着しにくい漢字、関連づけて教えたほうが効果的な漢字を吟味することで、読み書きの力が効果的に高まると考える。

○語彙として漢字を理解させるために

漢字がもつ様々な意味や、似た意味をもつ漢字同士の微妙な違いを理解することは、語彙として漢字を理解することにつながる。例えば「方」に「四角い」という意味があることを知ると、「前方後円墳」という言葉が具体的なイメージをもって理解できる。また、「合う」「会う」「逢う」「遭う」それぞれの違いを理解することは、相手や状況に応じて漢字を使い分ける言語感覚を養うこととなる。日常的な辞書の利用が、漢字そのものの理解を深め、漢字を語彙として理解することに効果がある。

(3) 漢字に親しむ言語環境

「漢字を活用する力」の育成には、「取り立て指導」に加え、児童生徒が漢字に親しむ言語環境を整えることが必要であると考える。国語科の授業以外でも漢字との新鮮な出会いが存在する環境は、漢字への親和性を高め、児童生徒自身の自己教育力を伸ばすはずである。漢字との様々な関わり合いが生まれるような環境を、教室や学校全体で整えることが大切である。例えば、漢字の学習のあとを振り返ることができたり、掲示物や学級だよりや黒板に魅力のある漢字コーナーを設けたり、スピーチで熟語や慣用句を取り上げたり、辞書や本や資料が身近にある環境を整えたりすることが、児童生徒に漢字を意識させることにつながる。また、国語科以外でも漢字を活用するという意識をもつことが必要である。各教科等の授業時間を含め、あらゆる機会や場面を漢字との出会いの場と考え、言葉を吟味する言語活動を設定する教師の意識が、児童生徒に「漢字を活用する力」を育てることにつながるかと考える。

(4) 研究概念図

本研究では、図4のように、漢字の「取り立て指導」と言語環境の整備が、「漢字を活用する力」の育成に結びつくこととらえる。さらに、「漢字を活用する力」は、左右の上向き矢印が示すように、ある時点で完結するのではなく、この力が育つことで、漢字を使おうとする意欲や、読み書きの力、語彙として漢字を理解することにつながり、各教科等や生涯学習の基礎へと広がることになると考える。

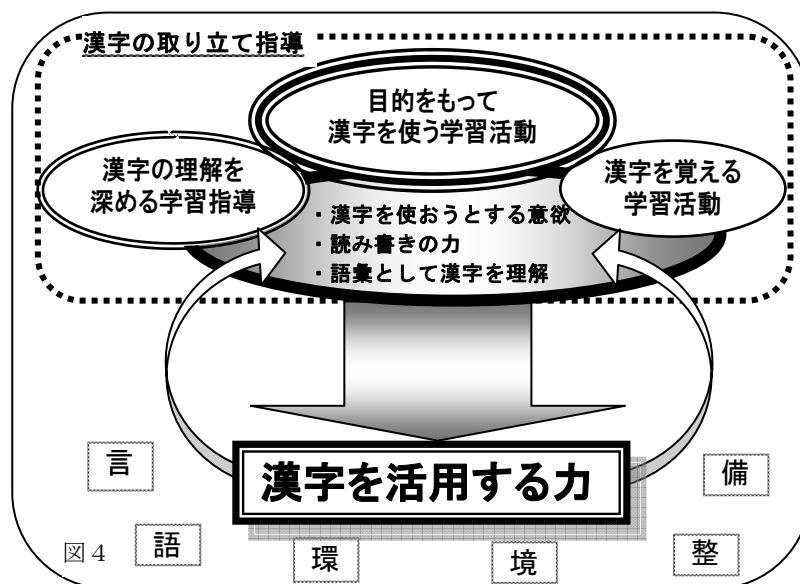


図4

Ⅲ 授業実践

1 漢字の学習指導のモデルプラン

「漢字を活用する力」の育成には、漢字の学習指導を様々な場面で関連づけ、意図的に計画することが重要である。そこで、年間指導計画の中で、いつどのような漢字の学習指導を行い、どのような学習と関連づけ、他教科の学習や学級活動とどのような関わりができるか。また、児童生徒が漢字学習を日常で生かしたり振り返ることができたりするような、学級での言語環境作りについて構想したモデルプランを提示する。このモデルプランは、小学4年生での実践をもとに作成した。

漢字の学習指導のモデルプラン(小4)

◎漢字の理解を深める学習指導		直接関連づけられる内容	学習指導の工夫
月	国語科学習指導計画		
	単元・教材名(光村図書)		
4	授業開き	3	<p>◎漢字の理解を深める学習指導</p> <p>■目的をもって漢字を使う学習活動</p> <p>直接関連づけられる内容</p> <p>学習指導の工夫</p> <p>(言語環境) 名前は児童にとって、一番身近に必要感のある漢字。互いの名前の漢字を目にすることで、漢字への親和性が高まる。</p> <p>■名札と名刺作り 1年間様々な活動で使用するため、一字一字をていねいに漢字で書く。</p> <p>■「自分のことを伝える手紙を書こう」 相手意識を持ち、住所や家族(祖父母)の名前等、身近な漢字をていねいに書く。</p> <p>国語(1年間を通して): 漢字係の児童は、自分が担当する漢字の専門家となって、書き順や気をつけて書く部分などを説明できるように準備し、発表する。 新出漢字は、漢字・読み・書き順・熟語(言葉)・例文をプリントに記入して計画的に学習。定期的に小テストを行い、定着の確認をする。 ■新出漢字を模造紙にも書いて掲示(p41参照)。(言語環境) みんなで例文を書きこむことで、様々な使い方を学ぶと同時に、語彙も増え、日常的に新出漢字を目にする機会を増やすことにもなる。</p>
	つづけてみよう	1	
	本と出会う、友だちと出会う 三つのお願ひ	8	
	手紙を書く	3	
	漢字の組み立て	2	
5	漢字辞典の使い方	3	<p>◎漢字を組み立てている部分の名称や部首について知る。</p> <p>■本や教科書から、同じ部首の漢字を探して集める。 <ワークシートは、p41参照></p> <p>「同じ部首の漢字を集めよう」</p> <p>◎漢字を組み立てている部分の名称や部首について知る。</p> <p>■本や教科書から、同じ部首の漢字を探して集める。 <ワークシートは、p41参照></p> <p>「漢字を漢和辞典で調べよう」 漢和辞典の使い方を知る。 ■「同じ部首の漢字集め」で自分が集めた漢字の読みや意味・用例を漢和辞典で調べることによって使い慣れる。</p>
	段落のつながりに 気をつけて読もう 「かぜ」ことの力	8	
	漢字の広場①	2	<p>書写:(書写のひろば) 字形や配置に注意して、手紙を書く。</p> <p>書写:(文字の組み立て方を知ろう) 文字の組み立て方に気をつけて、漢字を書く。</p>
	春のうた	3	
6	伝えたいことを はっきりさせて書こう 新聞記者になろう いろいろな符号	15	
	漢字の広場②	2	<p>「読みやすくわかりやすい新聞を作ろう」 読みやすくわかりやすい新聞を書くために、漢字を使うことの意義を理解する。</p> <p>書写:(配列を考えよう) 横書きの配列に気をつけて、硬筆で本の紹介カードを書く。</p>
	ローマ字	4	
7	伝言はまちがえずに	4	
	本と友達になろう ①白いぼうし	6	
	②本は友達 本のさがし方	10	
	漢字の広場③	2	<p>「おすすめの本」のカードを書こう 本の紹介カードを図書室に置いて読んでもらうことを目的にして、読み手を意識して書く。</p> <p>「辞書の活用」 辞書や辞典を使う場、使う必要性を感じる場を意図的に作り、辞書や辞典を使い慣れるようにする。</p>
	ぼく	2	
	調べて発表しよう 「伝え合う」ということ	16	
9	「にた意味の言葉」	3	<p>「にた意味の言葉を見つけよう」 ◎「にた意味の言葉」を、国語辞典を使い、意味や使い方に違いがあることを確かめ、語彙を増やす。 ■類義語辞典で「にた意味の言葉」を見つけ、どんなときにそれぞれを使うか調べる。教科書を見本にして、「にた意味の言葉」のクイズを作る。</p>
	漢字の広場④	2	<p>「伝えたいことが相手に分かるように書こう」 相手に分かることを目的に、読んでもらう意識をもって、言葉や漢字、表現を考えて書く。</p> <p>「漢字のひろば」①~⑥ 絵から想像をふくらませ、提示された漢字を文章の中で使う。書いたものを紹介したり、読み合ったりすることで楽しい活動になる。</p>
	場面をくらべて読もう 一つの花	10	
	文と文のつながり	3	
	材料の選び方を考えよう ①アップとルーズで伝える	6	
11	②四年三組から発信します 選んで伝える	11	
	漢字の広場⑤	2	<p>「同音・同訓意義の漢字カルタで遊ぼう」 ◎同じ読みの言葉にいろいろな意味があることを知る。 同音・同訓意義の漢字を教科書の巻末から集める。 ■選んだ同音・同訓意義の漢字の意味の違いを、国語辞典を使って調べ、カルタの読み札の文章を考える(p41参照)。読み札の文章をカルタに書く。 ■作ったカルタで遊ぶ(p41参照)。</p> <p>朝の会: カルタを作るときに選んだ同音・同訓意義の漢字の意味や使い方の違いを、スピーチで紹介する。</p>
	いろいろな意味をもつ言葉	4	
	調べたことを知らせよう 生活を見つめて	12	
12	表やグラフにまとめる	4	
	熟語の意味	3	<p>「熟語の意味を考えよう」 ◎漢字の訓読みや意味を手がかりにすると、熟語の意味が分かりやすいことを知る。 ◎熟語の漢字一字一字の読みや、意味を漢和辞典・国語辞典で調べて発表する。</p> <p>学年集会: 作ったカルタを紹介し、学年でカルタ大会をする。</p>
1	話し合って決めよう	6	
	つぶやきを言葉に	2	
	言葉って、おもしろいな 言葉遊びの世界	12	
2	漢字の広場⑥	2	<p>「漢字のしりとりでチャレンジしよう」 ■しりとりをしながら、漢字の音に注目して、いろいろな読み方があることを知る。</p> <p><辞書の活用> 国語の辞書や漢和辞典を自主的に使えるように、袋に入れて机の横に掲げるなどの工夫する。</p>
	カンジーほかせの 漢字しりとり	2	
	ごんぎつね	22	
3			
	計	200	+35(書写)=235時間

二つの小教材を意図的に関連づけることで、漢和辞典を使う必然の場ができる。

漢字を使うことで読みやすくなり、多くの情報を伝えられる便利さを理解させる。

横書きの配列に気をつけて、硬筆で本の紹介カードを書く。

辞書や辞典を使う場、使う必要性を感じる場を意図的に作り、辞書や辞典を使い慣れるようにする。

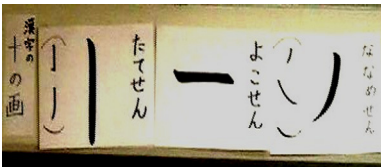
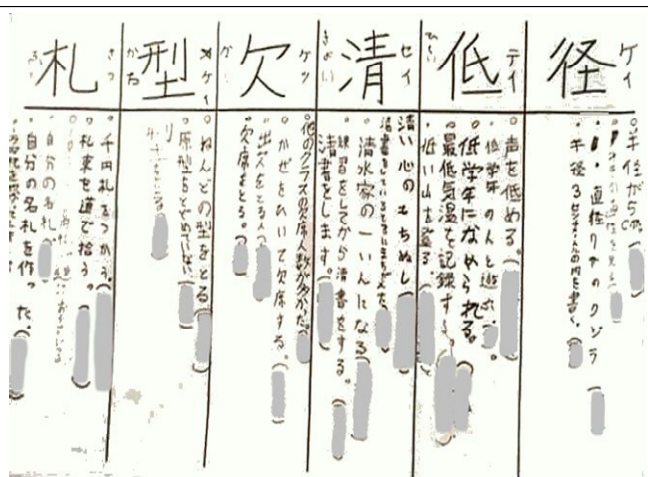
朝の会:
カルタを作るときに選んだ同音・同訓意義の漢字の意味や使い方の違いを、スピーチで紹介する。

学年集会:
作ったカルタを紹介し、学年でカルタ大会をする。

<辞書の活用>
国語の辞書や漢和辞典を自主的に使えるように、袋に入れて机の横に掲げるなどの工夫する。

具体例(掲示物や児童の学習あしあと)

新出漢字とその使い方がわかるように【模造紙掲示】

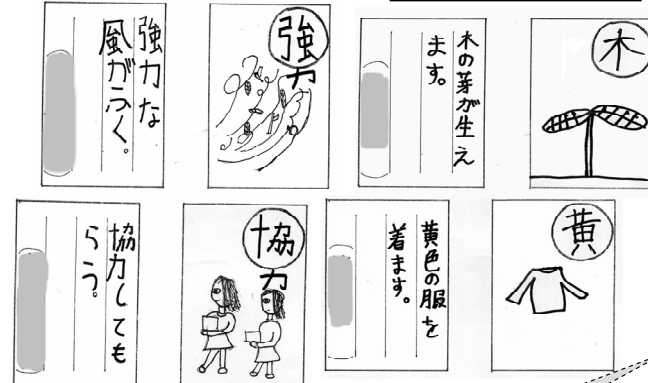


「十の画」【画用紙掲示】

同じ部首の漢字集めワークシート

糸	糸	糸	糸	糸	糸
糸 (意味: 糸)	糸 (意味: 糸)	糸 (意味: 糸)	糸 (意味: 糸)	糸 (意味: 糸)	糸 (意味: 糸)
糸 (意味: 糸)	糸 (意味: 糸)	糸 (意味: 糸)	糸 (意味: 糸)	糸 (意味: 糸)	糸 (意味: 糸)
糸 (意味: 糸)	糸 (意味: 糸)	糸 (意味: 糸)	糸 (意味: 糸)	糸 (意味: 糸)	糸 (意味: 糸)

同音・同訓異義の漢字カルタ



社会科の学習は、本や辞典で調べることを通して、多くの漢字にふれる機会にもつながる。
また、調べたことなどをまとめる際には、地名や地域の特産品・名産品を漢字で書くことが自然に行われるので、社会科の学習は、漢字を使い慣れる場として、関連づけがはかりやすい。

関連づけられる活動例・言語環境

学級活動(1年間をととして)
自分の文章が読まれることを意識させ、ひらがなばかりでは読みにくいことを体験の中から感じさせる。

■日記
(前期) 班で一冊のノートを順番にまわし、互いに読み合う。
(後期) ノートを半分にしたものを一人一冊用意し、個人で書いたら、週に一回提出する。

■席替えの手紙
クラスの友達に対する親しみや感謝を伝える活動。相手を意識しながら自分の気持ちを文章にすることで、互いを知りきっかけになる。

◎旧暦月の板書
黒板の日付に漢字の旧暦月名をそえる。毎日目にする事で、古典の世界への興味や関心にもつながる。
(睦月・如月・弥生・卯月・皀月・水無月・文月・葉月・長月・神無月・霜月・師走)

国語：(特設単元として(1~2時間))
◎「十の画」
参考『分ければ見つかる知ってる漢字 白川静先生に学んで漢字の学習システムをつくる』 宮下久夫 2002年 太郎次郎社

「十の画」(漢字の画を形の特徴によって十種類に分類したもの)のパズルで、漢字を組み立てる遊びをする。「十の画」を教えることで、漢字の点画の形や組み立てをくり、字形の特徴を理解する。

(言語環境) 「十の画」を教室に掲示する。

学級活動
「夏休みを漢字一字で表そう！」

- ①プリントを教室に掲示(言語環境)
- ②朝の会で、スピーチ活動(その漢字を選んだ理由を説明)

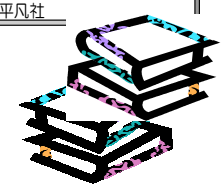
国語：(帯単元として)
◎「手作り漢字辞典」
年度当初に決めた担当漢字について調べて書いて書いたものを、クラスの「手作り漢字辞典」としてまとめる。その漢字が使われている熟語や文を日常生活(本、広告、親聞等)で見つけたら、随時書き込むことができる欄を作る。
(言語環境) 「手作り漢字辞典」を教室に置き、いつでも自由に見られるようにする。

学級文庫にそろえたい漢字関係の本の例

- 『漢字の絵本』五味太郎 岩崎書店
- 『絵でおぼえる漢字の本』1~6年生 ポプラ社
- 『学習漢字新辞典』加納喜光監修 小学館
- 『漢字のサーカス』馬場雄二 岩波ジュニア新書
- 『常用字解』白川静 平凡社

社会：
■「箱根のまちづくり」の新聞を作る。

社会：
■神奈川県を紹介するパンフレットを作る。



2 実際の授業

(1) 授業の目的

児童の漢字への興味関心の実態把握も含め、漢字に親しむ環境作りがまず大切であると考え、予備検証授業では、「漢字の理解を深める学習指導」を中心とした授業を行った。検証授業では、日常の活動や各教科の学習などとの関連づけを図りながら、児童生徒が意識して漢字を使う場の設定をねらって「目的をもって漢字を使う学習活動」を取り入れた授業を行った。

(2) 検証方法

ビデオ2～3台による撮影と、観察者（研修員）3名による記録。さらに、授業後のICレコーダーによる児童へのインタビューの回答、学習の振り返りの記述などから、手立てが意欲や漢字使用にどのように影響したか検証する。着目児をはじめから特定せずに、児童生徒の反応や記述の違いを比較・分析することで、漢字への興味や漢字を使おうとする意欲を高めるために何が有効に働いたかを考える。

(3) 授業内容と考察

①予備検証授業（7月実施）

予備検証授業A（小学4年生）

単元名	漢字について知ろう（3時間）	教科書の「漢字の組み立て」と「漢字辞典を使おう」を発展させて関連づけ、集めた漢字を調べることで漢字への興味を高めることをねらいとした。
単元目標	・漢字の組み立て（偏旁冠脚）について知る。 ・同じ部首をもつ漢字を集める活動を通して、漢字への興味を高める。	
単元計画	第1時 漢字の組み立て（偏旁冠脚）について理解する。 第2時 本の中から同じ部首をもつ漢字を見つけて集める。 第3時 前時に集めた漢字の読み方や意味、用例を漢字辞典で調べる。	
考察 (児童の様子)	どの部首を集めるか決める段階で、自分の名前に含まれる部首を希望する児童が多く、名前の漢字に対して愛着をもっていることを感じた。C1は、自分の名前にある「しめすへん」の漢字集めをし、授業終了後も自分が見つけた「祐」「祝」「祖」を黒板に書き加える姿から、漢字集めを楽しみ、様々な漢字を自分で見つけた満足感を得たことがうかがえる。	

予備検証授業B（小学5年生）

単元名	漢字の音のもとをさがそう（1時間）	「漢字の成り立ち」の発展学習。形声文字の仲間集めをすることで、漢字の面白さを知り、漢字に興味をもたせることをねらいとした。
単元目標	・漢字の音を表す部分についての理解を深め、 読んだり覚えたりする際の手がかりにできるようにする。	
単元計画	第1時 教科書巻末の漢字の中から、同じ音で共通する部分のある漢字を集める。	
考察 (児童の様子)	「安」「案」や「周」「週」の読みから、同じ部分をもつ漢字は同じ読み方になることがあることの確認をし、音を手がかりに漢字の仲間集めをした。予定終了時間になっても漢字探しに集中し、「もうちょっとやっていたい人？」という問いかけに、ほぼ全員が手を挙げたことから、夢中になっていたことがわかる。また、最初に提示した未習の「搾」の読みを再度尋ねると、挙手したC2が「サク」と読む。なぜそう読んだか尋ねられ、黒板に「作」と「昨」を書いたことから、形声文字の性質を理解し、それを利用することができたことがわかる。	

②検証授業（9月～11月実施）

検証授業は3回（小4・小5・中1で各1回）実施したが、小学4年生での実践はモデルプランに含めたため、ここではそれ以外の2つの実践と考察について述べる。また、実践の過程で様々な手立てを関連づける効果に気づいたため、新たに検証授業の考察に加えた。

検証授業A（小学5年生）

単元名 漢字を使って空想作文を書こう（2時間）

評価規準

国語への関心・意欲・態度	言語についての知識・理解・技能
提示された漢字を手がかりに想像をふくらませ、物語や空想日記を考え、書こうとしている。	漢字を文や文章の中で使っている。

単元計画 第1時 4年生下巻で学習した漢字について使用状況を振り返り、よく使う漢字は覚えていることに気づく。あまり使ったことがない漢字の使い方を考えて単文を書く。
第2時 提示した用例を参考にしながら、漢字を使って空想作文を書く。〈本時〉
展開の概略 4年生で学習した漢字の使用状況を各自に振り返らせ、漢字の使用について意識させる。

共通してあまり使えていなかった漢字20個を使って空想作文を書くことは前日に知らせておく。少なくとも5個は使うよう目標を持たせ、空想作文を原稿用紙に書かせる(23分間)。書いた作文を班で読み合い、感想交流をし、まとめて授業の振り返りを発表させる。

本時の展開と子どもの様子

学 習 活 動 【二】 教師の支援	子どもの様子
<p>1. 前時の振り返りをする。 T1「使えていなかった漢字はどのくらいあった？」 ・4年生で学習した漢字で、多くが使えていない漢字を使って作文を書くという目標を説明する。</p> <p>T2:漢字を調べられるよう、各自の机上に国語の辞書・漢字辞典を用意するよう指示。</p> <p>2. 空想作文の書き方を知る。 ・指定した漢字20個の読みや意味の説明。</p> <p>T3:漢字の使い方がわからない児童のために、用例や熟語を載せたプリントを配布。 ・漢字からどんな話が書けそうか確認。</p> <p>T4:「迷っている人がいたら、『救助隊』をテーマにしてみたら」と手がかりになる言葉を提示。</p> <p>3. 空想作文を書く。</p> <p>T5:悩んでいる児童に助言。また、漢字や使い方を間違えている場合は正しいものを教える。</p> <p>・終了時間を知らせる。</p> <p>T6:「もうちょっとやっていたい人？」と児童の意志を確認し、5分の延長を指示する。</p> <p>4. 出来上がった作品を読み合い、感想を交流する。</p> <p>T7:「使い方に間違いがあれば教え合うように」</p> <p>5. 学習を振り返り、空想作文を書いた感想を聞く。</p> <p>T6:「続きを書いてみたいと思った人？」</p>	<p>「20個くらい」「15個くらい」「10個くらい」・・・</p> <p>記入の指示はしていないが、①読みや意味をメモしている児童もいる。</p> <p>「自衛隊」「ふしぎな国」「お菓子がでっかくなる国」「イチゴの山脈」・・・</p> <p>中には書けずに四苦八苦している児童もいるが、多くが集中して取り組む。辞書利用も多く②指定漢字以外も使おうとしている。C3:プリントにはない「件」を漢字辞典で調べ「殺人事件」という語句で使用。</p> <p>③やめる気配ない。時間延長の希望確認にほとんどが挙手。延長した5分間も静かに続きを行う。</p> <p>友達の記事を手にとると、集中して読む。内容の面白さに、あちらこちらから笑い声が聞こえる。</p> <p>C4:「あんまり使ったことがない漢字をけっこう使った。」 C5:「使っていない漢字を使うっていいことだったけど、物語を書くのに集中してしまった。」 ④ほとんどが挙手する。</p>
<p>授業後のインタビュー</p>	<p>Q漢字を使うという条件があったことで書きにくかった？ C6:「関係なかった。」C7:「ストーリーに漢字が出てくるときに、その漢字を使えば合うから。」</p> <p>Qこの勉強する前は、こんなに漢字を使っていた？ C多数:「使っていない。」「使っていない。」 C8:「わかんない漢字はひらがなで書いてた。時間があつたから今日は辞書で調べた。」</p>

考察

空想作文の学習は、検証授業を含め9月～12月で3回実施した。以下四角枠に引用した児童の記述は、3回目の作文の後に、これまでの漢字学習を振り返りながら書いたものである。

【漢字への興味関心】

漢字を使って作文を書くため、自然に漢字への関心が高まった。このことは、傍線部①のように、漢字の説明を自主的にメモしたり、辞書で漢字の意味や熟語を調べたりする姿からわかる。また、学習の振り返りに漢字への興味を書いた児童は多い(児童が書いたまます引用、()内の文字と下線は筆者が追加)。

C9は、

今日はとても楽しかったので、また続きを書きたいというのものもあるし、空想作文にするとなぜか漢字を書くのが楽になるので、知らない漢字も調べて書こうという気持ちになりました。私は本を読むことが好きなので、たいがいの漢字は読めましたが、あまり書けませんでした。でも今日勉強して、やっぱり書けたほうが良いので勉強しようと思いました。

と、空想作文を書く楽しさから、漢字を調べて書こうという気持ちになったことを記している。また、

C10は、漢字の成り立ちや構造を学習したことで、漢字が好きになったことを書いている。

私は最初、漢字は「難しくてめんどろだ」と思っていたけど、今ではかんたん・・・ではないけれど成り立ちなどは調べてみるとおもしろいということが分かって好きです。しかも漢字がわかると読み方や書き方などが分かり、勉強になると思います。私は覚え方を工夫しています。たとえば「字」だったら、うかんむり(ウ)と子の字に分けることができます。そのように分けて考えると意味が分かったり、覚えやすくなります。

このようなことから、漢字の理解を深め、使う場を設定することが、漢字への興味関心を高めることに効果があったと考える。

【漢字を使おうとする意欲】

既習漢字の使用を振り返り、使う目的で学習を行ったため、漢字を使おうとする意識はもてたようだ。提示した20個の漢字だけでなく、傍線部②のように、それ以外の漢字を使っている児童や、見本の用例と違う使い方をしている児童がいることからもうかがえる。このことは授業後のインタビューにおけるC8の回答(辞書で調べながら漢字を使った)からもわかる。

またC11の記述からも、この実践が漢字使用の意欲を高めることに結びついたことがわかる。

この勉強をやったからは、なんか漢字を使う回数が増えて来たなあと思います。前はわからない漢字があると「まあいっか」とひらがなでかいていたけど、今は出来るだけ使おうと思うようになりました。分からなくなったら漢字辞典を使って調べたり、お母さんに聞いたりするようになって来ました。

<児童が書いた空想作文の例>

20	15	10	5	1	作文
加空機よ	ある	て	れ	と	元
体中が	顔の	わ	と	して	国
を上日	見	わ	と	取	会
つら陸	川	だ	し	り	議
ぬ公	川	が	と	上	買
いた。民	館	の	ま	げ	だ
そつ機	の	の	ま	の	事
れくと	時	は	の	だ	に
同時は	掛	れ	な	か	い
にゆて	ま	も	と	選	て
苦し	は	な	こ	こ	ら
さま	か	か	れ	が	殺
み航	の	か	は	は	は

400字 300字 200字 100字 400字以上

使うように
提示した漢字

隊・功・唱・航
陸・満・歴・景
貯・議・拳・孫
脈・街・候・帯
旗・殺・勇・堂

(小学4年生で学習した漢字で、あまり使っていない漢字として児童が挙げたものの中から、20個を選択)

【関連づけによる効果】

このクラスは毎日漢字練習を行い、漢字の小テストで高得点をとる児童は多いが、週2~3回行っている10分作文では限られた時間のためか、漢字の使用はあまり見られなかった。「目的をもって漢字を使う学習活動」を行うことで、漢字を使う意識が日常の言語活動につながることを目標に、空想作文の実践を行った。その後、10分作文においても漢字使用に変化が見られた。漢字を使おうという意欲を大切にするため、10分作文時に限り、児童が尋ねた漢字は随時教えることにしている。質問するのは毎回2~3人程度だが、作文の漢字使用率は全体的に高まった。また、意識をして漢字を使うという学習を経験することで、漢字練習や漢字テストの必要性を実感し、「漢字を覚える学習活動」への意欲が向上した児童もいることから、関連づけの効果があったといえる。

C12は次のように、漢字を使う経験を通じて漢字テストや漢字が好きになったことを書いている。

私は四年生の時は「読めるけど書けない」からきらいなので一番最初に出るのが漢字でした。でも、五年生になって覚えるようにしなくちゃ!と頑張っていいに漢字練習をしていると漢字のテストで100点が多くとれるようになりました。しかも、よくじゅ業で漢字の学習をするので、他の漢字を使うようもできて、漢字のテストとかも好きになりました。また、漢字がわかると、ふしぎな物で、覚える時も漢字を分解すると意味がなんとなくわかるし、すごい単準(純)だと思いました。今度は漢字好きだと思いました。

< 日常的に行っている 10 分作文の例 >

検証授業前

0字 ↓ 10 100字 ↓ 5

るそつです。

をれはなりうんキキを
しまはるをきつれお今
なしをとうけうし日
くたあ校ほすはつえの
なけ長うこ、けて
し横る先くしかく朝
たりは「は」あかを水会
りはいとがつけとま下
を、けるとをおしたは
あ、言「い」るとしした。
いあうつと、めえ。校
アケニマ、おてて校長
のるとまし、く長先
ことをし分えつれ先
とがあかかしくさしはな
よしし「次」もれきたら
と「かえ」はたすの「ま」び
わって、なしこまが方
かりく横くたこ

200字 100字

「私は漢字が苦手でした。けど、なんか使ってみると、漢字を使うことがいいことなんだなと思いました。なぜかと言うと漢字を使わないと、文が長くなるし、ごちゃごちゃしてくるからです。私は漢字が苦手でも、ちゃんと漢字を使うようにしたいです。」と、学習の振り返りに漢字を使おうとする意欲を書いている。

また、10 分作文から、漢字使用に変化が現れたことがわかる。

検証授業後

200字 ↓ 10 100字 ↓ 5 1

と、自分の名前をうごかしたり、
ほかにいろいろな名前をかきまわりました。

電ヤるしニとユしエ
気一のか十るーた場私
をででいのり。のハ
通鉄しニくをー景中ケ
しをた+のめの初に、
てス、個説す説にハジ
切パ私の明れ明聞すの
るーははをたでいふ工
ことワ、も聞のしたく場
とさワのきふを説た見
にセクをまか。明く学
おアヤ使しぼアハさ
と切ーつたえの、人行
るる回アアアアかのキ
きとヤ切ニまとし機
まワトアアアアハハ械
とイハ「国」く、ハカ
たヤ形く、×コあ
にハ作たにをコまの

200字 100字

以上のことから、漢字を使う機会を意図的に設け、日常活動と関連づけることで、それぞれの学習につながりが生まれ、相乗効果が期待できるとともに、「漢字を活用する力」に結びつくことが明らかになった。

検証授業 D (中学 1 年生)

単元名 これで納得！わたしたちが身につけるべき常用漢字（4 時間）

評価規準

国語への関心・意欲・態度	言語についての知識・理解・技能
常用漢字の存在とその意味及び自分たちが習得すべき漢字について理解し、漢字に対する認識を新たにしている。	事象や行為などを表す多様な語句（漢字を含む語句）について関心をもち、正しく使用している。

- 単元計画**
- 第 1 時 常用漢字の歴史と、その習得の必要性を知る。
 - 第 2 時 他教科の定期テストに使用されている「語句」（漢字が使用されている学習語彙）を抜き出し、その使い方を確認する（班毎に教科を決める）。
 - 第 3 時 自分が着目した「語句」を使って予想問題を作成する。〈本時〉
 - 第 4 時 第 1～3 時の学習を振り返り、今後の漢字習得について考える。

展開の概略

前時に書いた学習チラシ（他教科の定期テストから「語句」とそれを使った文を抜き出したもの）をもとに、来年の 1 年生に役立つ予想問題作りをする。まず個人で問題を作り、次に班で発表し合い、代表を選ぶ。最後に各班の予想問題を発表し合う。

展開と子どもの様子

学習活動 [二二] 教師の支援	子どもの様子
<p>1. 「竹取物語」の暗唱をする。(毎時導入に行う暗唱活動)</p> <p>2. 前時の確認をする。</p> <p>T1:前時の報告で「発見はなかった」と発言した生徒に、前時の学習で気づきがあったことを指摘し、報告の続きをうながす。</p> <p>3. 本時の目標・授業の流れを確認する。</p> <p>T2:理科の資料集の巻末に発見した語句(漢字)の解説を紹介し、他教科でも漢字学習が重要であることを確認。</p> <p>4. 予想問題を作る。(個人)</p> <p>T3:悩んでいる生徒に助言する。また、漢字や「語句」の使い方を間違えている場合は、正しい使い方を教える。</p> <p>5. 班の代表の予想問題を選ぶ。(班)</p> <p>T4:問題を選ぶ基準を常に確認できるよう、黒板に掲示。</p> <p>6. 各班の予想問題を発表する。</p> <p>T5:各班の問題を見ながら発表が聞けるよう、OHC(実物投影機)でスクリーンに投影する。問題を選ぶ基準はいつでも確認できるよう、黒板に掲示。</p> <p>7. 次回の予告をする。</p>	<p>大きな声で、冒頭部分を暗唱する。</p> <p>当番の生徒が、前時の学習内容を報告する。それ以外の生徒は、静かに聞いて確認している。</p> <p>国語の辞書を利用する生徒多数。また、他教科の教科書やプリントを参考にしながら、問題作りを行う。早く問題作りが終わった生徒は、「語句」の詳しい説明も記入している。班長が司会で、各自が問題を発表する。問題に使用した教科特有の「語句」の意味や、問題の内容や妥当性まで話題に上る班もある。それぞれ班が、問題の紹介とともに、問題作りの過程で気づいた「語句」についての発見を発表。</p> <p>〔1班: 体育、2班: 音楽、3班: 数学 4班: 家庭科、5班: 理科、6班: 社会科〕</p>

<生徒のワークシート例> 左側: 他教科の「語句」と使われ方を抜き出した学習チラシ 右側: 予想問題

平成20年度 1年生のみなさんへ 作成者: 1年 組 班

★左の語句を使って、予想問題を作りましょう。(資料4)

数学 科 ちょっと役立つ学習チラシ (前期版)

★「どの教科ならではの漢字を含んだ語句」をピックアップしてみましょう。

○覚えておいたほうがいい語句の一覧

語句	テストでは、こんなふうに出てきました。
例 符号	0より小さい数や正の符号または負の符号を使いたない。
1 絶対値	-5の絶対値をいいます。
2 文字	次の式を、横の表し方(文字を使った式)の表し方(約束に従って表します)。
3 不等号	-4と-3の大小を不等号を使いたない。
4 値	$x=3$ のとき、 $x-5$ の値を求めなさい。
5 等式	等式で等号(=)の左側の部分を左辺、右側の部分を右辺を2つに分けて両辺。
6 記号	次の式を「 \times 」の記号を使いたない。
7 原点	原点との距離が2以下である整数をすべて求めなさい。
8 交換法則	2つの数 a, b について $a+b=b+a$ が成り立つ。これを加法の交換法則という。
9 正の数、負の数	500の利益を+500円と表したとき、300円の損失を正の数、または負の数を使って表します。
10 計算	次の計算をしなさい。

○20年度は、こんな問題が出題されるかも!

(予想問題)

問1 ① $(+24) \div (-3)$ を計算してみよう。
② $(-4) \div (+7)$ を計算してみよう。

問2 $a = -7$ のとき、次の式の値を求めてみよう。
 $(1) -6a$

問1	
2	
問2	(1)

(解答と「語句」の解説)

$-6a = -6 \times (-7)$
 $= 42$

式の値とは

式の中の文字を数に置きかえることを、文字に数を代入するといふ。また、代入して計算した結果を、その式の値といふ。
<教科書から>

問1	-8
2	-4
問2	(1) 42

考察

引用した記述は、授業の中で積極的に辞書を利用する姿が見られた生徒のものである(生徒が書いたまを引用、()内の漢字と下線は筆者が追加)。

【漢字への興味関心】

常用漢字が社会生活で漢字を使用する目安であることを確認し、常用漢字習得の必要性を知ったことで、漢字についての認識を深めたことが学習の振り返りからわかる。C13は、

漢字を書くのが面倒で平仮名を使うことの多い私でしたが、今回の色々な学習で漢字の大切さがわかったと思います。平仮名やカタカナだけでは、意味が通じなかったり、文として正しくならなかったりと困ってしまうことがあります。私は、漢字というのは使いすぎてもいけないし、使わなすぎてもいけないというものだと思います。自分の決められた漢字を正確に覚えることが、いちばん大切なことだと考えました。例えば、私の読めない漢字は、たいして今では使われていないか?と調べてみます。こんな風に漢字は奥が深いなあ、とよく思います。私は、漢字の読みや書きだけでなく、意味などもセットにして覚えると楽しくないかと思ひます。意味を知ることによって新しい発見があると、何となくですが、うれしくなります。これからも色々な漢字を学習したいです。

と、授業を通じて漢字の重要性や奥深さを考え、漢字学習に対して意欲が高まったことを書いている。

【漢字を使おうとする意欲】

漢字習得の意義を理解したことで、漢字を使う必要性の自覚につながったことが記述からわかる。C14は、漢字の有用性に気づき、漢字を使おうという意欲を書いている。

【関連づけによる効果】

文章を書いている時にわからない漢字や、ふりがながわからなかったら、国語辞典を使い調べて書く大切さがよくわかった。(漢字を使わないと読み手としては読みにくいし、社会に出た所(時)にはじをかいてしまうことがわかった!) <中略>この授業をうける前は、「漢字なんて使わなくても一応読める。中学校に入るまでに1006字も覚えてなくても」と思っていました。授業をうけてからは「中学までに1006字おぼえるには普通かもしれない…。それに比べて漢和辞典の漢字の総数は約12000字もあるから、まだ半分もいってないんだ!!「漢字をおぼえるのはたいへんだけど、がんばって漢字を使おう」と思えるようになりました。最低でも常用漢字だけはかんぺきにおぼえ、使いたいと思います。ケータイの漢字がポケベルのように“全部”カタカナだったら読みにくい上に、解説するのに時間がかかる。へたをすればたかさんの意味がとれてしまうので、漢字があつてよかったと思います。

生徒にとって身近な定期テストを教材として学習することで、他教科の学習語彙にも漢字が多く使われていることに気づいたことが学習の振り返りに書かれていた。

以下のC15の記述からは、他教科の学習語彙に興味をもち、日常生活でも使用されているという発見を通じて、漢字学習への意欲が自覚されたことがわかる。

前までは漢字についてよく考えていませんでした。けれど、この学習をして、覚えなくてはならない漢字の数や常用漢字などを学んで漢字について考えることがいろいろとできました。教科得(特)有の語句なんて、1回も考えたこともなかったし、教科得(特)有の語句で問題を作ってみてその語句が他の教科でも使われるや、日常生活の中でも使われているなどの発見もあり、とても深まりました。

このようなことから、他教科の定期テストという、生徒にとっての実生活を意識して学習指導を構想することが、学習語彙や漢字の使用について考えさせることに効果があったといえる。

IV 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

○漢字の「取り立て指導」の整理

「漢字を活用する力」の育成を図る漢字の「取り立て指導」を、目的によって3つに整理したことは一つの成果である。「漢字を覚える学習活動」「漢字の理解を深める学習指導」「目的をもって漢字を使う学習活動」に分類したことにより、「漢字を活用する力」を育てる学習指導の全体像がとらえやすくなり、学習指導の相互の関連づけを意識する大切さが明確になった。

○漢字の学習指導の過程の再構築

今までも、文や文章の中で漢字を使う力を育てる重要性は指摘されていたが、習得のための「漢字を覚える学習活動」が漢字指導の中心となる傾向があった(I章の図1参照)。漢字の活用が、習得や漢字を使おうとする意欲につながることを示したことで、これまでの「習得を先に」という漢字の学習指導の過程を本研究は新しく組み替えたといえる。また、使う場と対象となる漢字を明確にした実践の効果を確認できたことで、漢字を使う力を育てる具体的な手立ての提示ができた。

その成果が顕著に現れたのは、漢字を使って空想作文を書く検証授業である。その要因としては、3回という回数と、日常行っている作文活動との関連づけによる効果が考えられる。「漢字を使うように」と児童生徒に呼びかけるだけでなく、漢字を意識して使う学習の場を設定し、その意識が持続されるように日常活動と関連づけることが重要であることが確認できた。

○漢字の学習指導のモデルプラン作成

漢字の「取り立て指導」と様々な学習活動との関連づけの具体例や、言語環境作りの工夫を示すことを目的にモデルプランを作成した。今回は特定の学年だけだが、1年間の流れがわかることで他学年での計画を作成する時にも参考にできると考える。

○学び合いを生かす視点

関わり合いの中で育つ活用の力を、ビデオによる検証の過程で垣間見ることができた。検証授業では、漢字を使って書いたものを互いが読み合う交流の時間を設けた。知らなかった使い方を学んだり、間違いに気づいたり、助言し合うという学習活動を期待したからである。小学4年生では、手作りカルタでカルタ大会を行ったが、「これ〇〇さんの作ったカルタだよ」という言葉がよく聞かれた。また、空想作文の授業では「どの漢字使った?」と見せ合いながら、正しい漢字を教え合う姿が見られた。関わり合いが互いを認め合う姿勢につながり、漢字を使おうとする意欲が一層高まったと考える。関わり合いを生かす授業展開の重要性に気づくことができた。

2 今後の課題

「目的をもって漢字を使う学習活動」として、漢字を使って空想作文を書く授業を行ったが、物語を作る力や、自分の考えを文章にする力も同時に必要となるため、漢字の使用以外でつまずきを感じてしまった児童がいた。漢字の使用以外の困難さを減らし、漢字を使うことに集中して取り組める学習活動や、漢字を使いたくなる場を構想し、「漢字を活用する力」の育成につながる作文の学習を広げていきたい。本研究では、「児童生徒が漢字を使おうとする意欲を大切にする」という視点で実践を行った。児童生徒が漢字を使う経験を重ねることで、文脈の中で言葉を吟味する言語感覚も養われ、漢字を適切に使う力も育つと考える。今後、「目的をもって漢字を使う学習活動」を継続して行うことの効果も検証していきたい。今回提示したモデルプランは小4だけだが、漢字を活用する力を育てることを目標に、9年間の見通しをもった小・中全学年のモデルプランの作成を今後進めていきたい。

教室では、特別な教育的ニーズのある児童生徒や、日本語を母語としない児童生徒も学んでいる。中には漢字が原因で学習につまずいたり、コミュニケーションに困難が生じてしまったりする児童生徒がいることも推測される。このような児童生徒の「困り感」を教師が理解しようとする姿勢をもち、特別支援教育や帰国・外国人児童生徒教育の先行研究から学ぶことにより、本研究の課題が深化すると考えられる。今後、児童生徒が必要感をもつ漢字や興味のある分野の語彙から漢字の学習指導を行うことなどの実践を通して取組の充実を図りたい。

最後に、研究を進めるに当たり、ご支援、ご助言をくださいました講師の先生方、また、研修員の所属校や南加瀬中学校の校長先生をはじめ、学校職員の皆様に心より感謝し厚くお礼申し上げます。

【参考文献】

- | | |
|-------------------------------------------------------------------|-------|
| 倉澤栄吉『倉澤栄吉国語教育全集 6 生活に根ざす言語生活』角川書店 | 1998年 |
| 首藤久義・卯月啓子共著『言葉がひろがる I』東洋館出版 | 1999年 |
| 日本国語教育学会編集『国語教育辞典』朝倉書店 | 2001年 |
| 首藤久義『生活漢字の学習支援』東洋館出版 | 2003年 |
| 卯月啓子『漢字と遊ぶ 漢字で学ぶ』東洋館出版 | 2003年 |
| 文化審議会「これからの時代に求められる国語力について」平成16年2月3日答申 | 2004年 |
| 国立教育政策研究所教育課程研究センター
「平成16年度特定の課題に関する調査 調査票及び解答類型（小学校・中学校）－国語－」 | 2004年 |
| 国立教育政策研究所教育課程研究センター
「特定の課題に関する調査（国語）調査結果（小学校・中学校）」平成18年7月 | 2006年 |
| 『朝倉漢字講座2 漢字のはたらき』朝倉書店 | 2006年 |
| 中央教育審議会
「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の学習指導要領等の改善について」（答申） | 2008年 |

【指導助言者】

- | | |
|--------------------------------|-------|
| 千葉大学教育学部教授 | 首藤 久義 |
| 千葉県柏市立高柳小学校教諭 | 卯月 啓子 |
| 臨床教育研究所わいわい所長（元川崎市総合教育センター相談員） | 馬場 英顕 |
| 川崎市立小学校国語教育研究会長（川崎市立東生田小学校長） | 片桐 文雄 |
| 川崎市立中学校教育研究会国語科部会長（川崎市立平間中学校長） | 坪田 四郎 |
| 川崎市総合教育センターカリキュラムセンター指導主事 | 新垣 英一 |